

ひとつ・いん



★夜のきらめきは、カクテ
ルの中の一粒の宝石から

北野の一角にあるこのお店は、地元“神戸つ子”達にはもうすっかりお馴染みのカクテルバー。他一味

みにあわせて、つくっても
らい、カルテに登録して
らうシステムになつてい
る。世界にひとつしかない
あなただけのカクテルが楽
しめる。

その他におまかせカクテ

入れることで、誕生石、あるいは好きな石(パールアルマジスト、トパーズなど)が中心)を入れるオリジナルカクテル三千円。お奨めは、「セレジエネーミングカクテル」。男女を問わず、カクテルの味をお客様自身の好

また、毎月の月末には定例パーティーに男女20名を招待。ジュエリーオークション、キヤツシユビングなど楽しい催しがいっぱい。詳しくはお店まで。

リツチに飲んで、おしゃれにジユエリーで演出して下さいと店長の松本さんの言葉。

■神戸市中央区北野町3-2
P 5 B K ブラザ 1 F
M 6 A M 2 (日)は A M 12
まで 食 232 0 0 4 8 無休

■神戸市須磨区若宮町3-3-4
電 736 AM8:30PM9
—1991 夏期無休

メニューの全てを手ごくりで押し通しているので、味は保証つき。ランチセツトメニューが八八〇円からと、お値段も手頃。TAK-E OUTもできるブルーシールのアイスクリームも夏にはうれしい。

A small white dog stands on a porch, looking towards the camera. The porch has a dark railing and a white door behind it.

と、四季折々の花が生けてあり、忘れかけた優しい心をとりもどしてくれる。

A black and white photograph of a storefront. The building has a curved facade. A large sign at the top reads "SAND BEIGE" in stylized letters, with "THE STORE" underneath. Below the sign is a glass door and window display area.

ついた。明るい人柄を慕つて訪れる常連客も開店一周年を祝ってくれたという。

一されたボップな店内には若いカップルやファミリーの姿が絶えず、ママの峯栄子さんの姿もすっかり板に

須磨海浜水族園から国道
2号線を隔てた向い側の、
カフェレストラン SAND
BEIGEが開店一周年を迎えた。
ターコイズグリーンで統

★S A N D B E I G E
開店一周年を迎える

★カフェ口ワイヤルの炎か
らロマンが生まれる



★誕生日ありがとう運動

ポケット
ジャーナル



姉妹都市提携に仮調印 神戸・バルセロナ



バルセロナ市内

'91年7月15日、午後8時すぎ（日本時間7月16日前3時すぎ）バルセロナ

面したスペイン北東部の都市。人口は約170万人で、港湾と結びついた鉄鋼、造船、運輸資材等が発展、自動車もファイアット、ルノーなど

外国資本の生産拠点となっている。'88年に万国博を開催するなど、コンベンション都市としても発展、「92年

はバルセロナ・オリンピックが開催される。

また、ピカソ、ミロ、ガウディら多くの芸術家を輩出し、市内に60の文化、科学施設、55の美術館、300以上の図書館を有し、スペインの文化、科学活動の中心地のひとつでもある。

当面の交流は、7月13日にバルセロナ市を出航した復元された「サンタ・マリア号」の受け入れ（'92年春）とアバランリゾートフェアへの参加招請（'93年夏）。バルセロナ市は地中海に



昨年の受賞者

▼ 神戸市長杯バイリンガルスピーチコンテスト開催

神戸YMCAクロスカル

チャラルセンターの主催で

第12回神戸市長杯バイリンガルスピーチコンテストが開催される。

今年のテーマは「新しい

世界像を求めて—共生—」

●応募方法は、申込書（Y M C Aに請求）及び日本語と英語を合わせて10分間のスピーチを録音したカセットテープ（英文か日本文どちらかの原稿（英文はタイプすること））を10月25日必着で神戸YMCAクロスカルチャラルセンター（〒650神戸市中央区加納町2-1-15）まで郵送すること。

この原稿とテープをもとに約10名の決勝出場者を選出し、11月24日に決勝大会を行なう。特賞は、サンフランシスコ大阪往復切符など豪華。

詳しい問い合わせ先は、神戸YMCAクロスカルチャラルセンター

A 078-241-8801
FAX 078-241-8801
詳しい問い合わせ先は、神戸YMCAクロスカルチャラルセンター

ひとりひとりの生き方が問われる時代。テーマである「共生」の意味は大きい。

多元化する社会の中で、車椅子で街に出れば!! 日本では交通事故により毎週三百九十人の人が車椅子に乗るようになるといわれています。それには車椅子などでの自身不隨くなる方をおられますから、車椅子の使用者は相当居られるはずですが、日本の社会はどうして車椅子に意地悪なんでしょう。駅にはまったくエレベーターがない。バスにも乗れない。だれも自由にどこへでもおられますから、車椅子の使用者は到底いられない。車いすに優しい社会にならなければ老後は参りたるものになるだろうといわれています。

ジャーリストの大熊さんが自分も右足をギブスで固定して車椅子に乗り、スウェーデンに行く障害者のグループに同行されました

ます自宅から最寄りの私鉄の駅に行なったところエレベーターがなく、駅員に頼み五十三段の階段を車椅子ごと人を運ぶといわゆる重労働に恐縮して断念、タクシーで東京駅に行かれました。そこ

の車椅子の受付に行くと新幹線専用といわれ、大汗をかいて成田エキスプレスへ行くエレベーターで改札口のあるフロアへ降り、改札を通って別のエレベーターで地下四階へ。さらりに別の乗り換えて地下五階のホームへたどり着けました。おまけに成田のホテルから空港へは人間とバスで別々に乗せなければなりませんでした。なんとかならないでしょうか。（K）

誕生日ありがとうございます!!
神戸市中央区御幸通八一
神戸国際会館1階郵便局の隣

8078-241-8801
8078-241-8801

車椅子で街に出れば!!



8078-241-8801
8078-241-8801

8078-241-8801
8078-241-8801

★ 生田神社で亀井一成さん
熱の込もった講演

▼ 中国留学生友誼交流懇親会開かれ
る

神戸地区中国留学生聯誼

会主催による友誼交流懇親

会が、7月6日、神戸華僑

会館で開催された。

神戸地区中国留学生聯誼

会も、今年で7年目を迎えた。

結成当初は30名だった

神戸地区の中国人留学生も

今では400人を数えるまでに

なった。

今回催された友誼交流懇

親会は、中国留学生の交流

と関係者に対する感謝の意

を込めたもの。

この開催にあたっては、

洪再生中国留学生聯誼会会

長も大忙し。連絡先になつ

たひとつ広がった。

7月4日生田神社で行われた兵庫県神道青年会例会で、王子動物園の亀井一成さん講演をされた。生田神社で行われた兵庫県神道青年会例会で、王子動物園の亀井一成さん講演をされた。

人間も共通のもの」と熱く語り、聴く人は身を乗

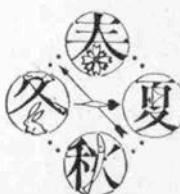
り出して聞き入っていた。

尊さ、親の偉しさは動物も

人間も共通のもの」と熱く語り、聴く人は身を乗

り出して聞き入っていた。

時 花 程



文化の種を生かす

神戸は歴史がない、な

どよく言われる。そん

なことはない。神戸にも

悠久の歴史はある。しか

し残念ながら、戦災で焼

失したことあって、歴

史物語は神戸の中でその

面影をとどめている。

神戸は歴史がない、な

どよく言われる。そん

なことはない。神戸にも

悠久の歴史はある。しか

し残念ながら、戦災で焼

失したことあって、歴

史物語は神戸の中でその

面影をとどめている。



講演風景

ている、彼の住む神戸留学

生会館には留守番電話を構

えて、連絡は夜中までかか

つたという。

また大阪、京都からも留学

生を迎えて、交流の輪はま

たひとつ広がった。



懇親会風景

神戸も街の歴史や物語をあつめている。北野町界隈は、神戸開港の明治維新の歴史を背景に物語りのよすがになつていて、芥川賞作家の新井満氏の指摘によれば、セピア色の写真のようなノスタルジイーの魅力ということになる。

近く還都千二百年を迎

て村雨堂という小さな祠

曲である。須磨には松風

町、村雨町もある。そし

て村雨堂という小さな祠

があるが、その扱いはお粗末の限り、こんな有力

な文化的の種こそ大切に生

かす工夫がほしい。

△ Y V

★ 服飾ミロ（西條幹男）が移転。
〒659 中央区加納町3丁目自14-18号

（22） 3 2 0 5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

652 西宮市南越木岩町8-13阪急苦葉園駅前苦葉園第一ビル2F夙川洋画研究所 〒079-8) 71-5

8 7 ビスク・ドール工房 〒0

7 9 8) 72-19316

15 露 0 7 9 8 (52) 1 5 6 9 苦葉園のアトリエと工房はそのまま〒

</div

K.F.S. NEWS 155

コウベ・ファッショントーサエティ

神戸ファッション市民大学OBによるグループ
神戸のファッション都市化をめざす

事務局／神戸市中央区東町113-1 大神ビル9F
月刊神戸っ子内 TEL.078-331-2246

熱気に満ちたパネルディスカッション

6月21日（金）中小企業会館においてK.F.S.会員によるパネルディスカッションが行なわれた。パネラーは木村さん、松田さん、是永さん、植田さん。まずはそれぞれ4人の仕事の概要から。

植田さん「私は森真珠の2Fのショールームで販売をしています。昨年は毎日TVで4月～9月まで花真珠が放送されました。番組で使われた真珠はすべて森真珠のものです。」

木村さん「私は紳士服の裏地を販売しています。オーダー専門ですが、湾岸戦争、バブル経済の崩壊で高額の紳士服の注文の着数がへりました。ですから最近はかなり厳しい状況です。特にオーダーは職人さんがへってきていましたから。しかし、裏地やボタンを換えて下さいというお客様もふえています。」

松田さん「洋裁を教えて20年になります。トアロードでお店をもつたこともありました。センタープラザで洋裁を教え、今は阪神御影でオーダーをしています。これからは年配の方にもおしゃれを楽しんで頂きたいですね。」

是永さん「美しく正しい姿勢をつくら

なければ健康ではありません。昭和41年から、健康体操教室をはじめ、今はハイエイジクラスの為のリズム体操教室をしています。主婦が着物を着たまま手軽に台所에서도できる体操を始めたのが最初です。」

植田さん「これからは、ニーズからウォンツにきりかないとダメですね。パールのネックレスは生活必需品になっています。今、デザイナーにも力を入れています。というのはパールが冠婚葬祭のみでなく、例えばジーンズにチョーカーのネックレスもできる、ちょっとスカーフを巻くだけでカジュアルブローチをネックレスに使うこともできるわけです。」

木村さん「裏地では、一時流行った、ワンポイント的なものがありますがほとんどは無地です。表地の色とあわせて濃淡、グリーン、茶、などが中心です。外国人は裏地はすべればいいという感覚ですが、日本人は裏地に关心をもっています。主婦などが特に年々流行に敏感で、同じグレイでも、赤味のもの、青味のものとおしゃいますね。」

松田さん「先程も申しあげたように、年配の方のおしゃれですが、年をとったから、赤やピンクがダメというではなく、年をとったからこそ、着てほしいですね。男性の方はどうですか。」荒津さん「最近は男性も色彩感覚がかわってきました。明るい色を着るようになりました。ゴルフウェアなどは特にそうですね。健康やおしゃれに気をつけ、仕事をし、楽しく年をとろうという風に。我々の年代がキーポイントです。もっとおしゃれをして下さいと話をロータリーですると、次の週からはポケットチーフをしてこられる方もいます。話の効果があって嬉しいですね。」

田中会長「テレビでも、藤本義一が頭が真白のまま出てきてから、染める人が少になりました。との流れは大きいです。洋服も同じです。」と、約2時間半の熱っぽいフリートーキング。



る・ぼ・る・た・ー・じ・ゆ・神・戸・

兜子の館 やかた

文・有井 基
△フリーライター▽
カメラ・池田 年夫



林の坂道に、ひっそりと静まり、それでいておしゃれな喫茶店がある。名づけて「ギャラリー&珈琲サロン・兜子館」。十年前の早春、ふらりと世を去った俳人・赤尾兜子の妻・恵以さん、二年前に居宅を改装して開いたサロンである。

神戸市東灘区御影山手一丁目一三ノ四、といつても分かりにくかろう。阪急「御影」駅の山側を

神戸方向へ、線路沿いの坂道を上りつめ、右に折れて約五〇メートルの左手だ。御影北小学校の西門前に当たる。板張りの白い洋館といった印象のつくりは、内外装とともに恵以さんのデザインだという。

道に面して、手書きの案内書が、雨に濡れないようビニールに包んでさげてある。同人・会員三百人を数える俳誌『渦』の発行所で、恵以さんが夫の遺志を継ぐ発行人なのだから、俳句教室や句会案内は当然としても、書道教室、英語教室、ピアノ教室、そして、占いの会なんてのもある。タロット占いや水晶占いなんてするタチじゃないから「四柱推命ですか」と聞いたたら

「ええ、先生につきましてねえ。あれは統計ですから当たる確率も高いんです。この上に短大があって、女の子が

この兜子館をみなさんのが好きなように使って下されば満足です、と話す恵以さん。



相談に来てくれるんですよ。」

まあ、この人なら、どんな相談が来ようと、本音で答えを出すだろう。

しゃべっているところへ、この春に出版された『赤尾兜子の世界』の編著者・和田悟朗さん、「渦」の編集を担当する小泉八重子さんが、にこやかに訪れた。先に来ていた斎藤芳子さん、大盛和美さんを含めて、仲の良い兄妹が集まつたような雰囲気だ。同行した本誌「神戸っ子」編集長の小泉美喜子さんも「いいわねえ」を連発。旧知の恵以さんと話し込む。思い出をつなぎ合わせて連珠を組むように。

コーヒーが運ばれてきた。味も香りも申し分ない。長男の徳也さんが心をこめて造つて下さったそれもあつたから、ここ（兜子館）を開いたんです」

恵以さんの母ごろは、だれよりも一粒ダネの徳也さんが知っている。限りなく父の面影を自ら帶びると同時に、父母と異なる道で、自分を生かすことだろう。

そうしたうちにも、お客様がドアの鈴を鳴らして入ってくる。「コピーおねがいします」「コーヒーおねがい」。恵以さんがコピー機を操

シャレタ外観の前で…。



作し、徳也さんがコーヒーをたてる。客が途絶えたところで、恵以さんに一曲の演奏を所望した。コーヒーサロンのド真ん中に、デーンと据えられている黒いグランドピアノは「クラシックのカラオケ」、あるいは音楽サロンの大道具だ。これが実際には、どんな効果があるのか。

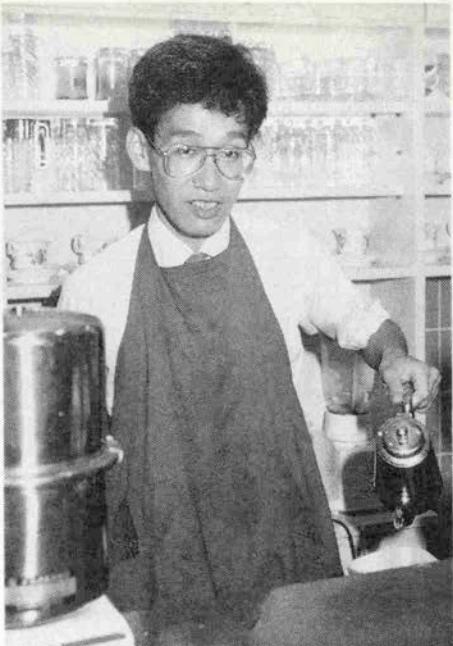
恵以さんは、おもむろに座つて、ピアノを弾いた。二十歳の時からなじんだキーが、コンピューターによるオートマティック演奏のように踊った。曲はタカラヅカの「すみれの花咲くころ」。自分でひけらかさず、人に失望を与えない、絶妙の心くばりである。

「ホント、ここは、クラシックのカラオケでも、ちょっとした音楽発表のショーや、美術作家の展示でも、好きなように使って下さってこそ、うれしいのです」

これが、よそ行きでなく、きわめて当たり前に、明るく言えるところに、兜子館の、というより、恵さんのグラウンドがある。

この日は、松花弁当を楽しむ会だった。フランス料理を楽しむ会と同様、五人から二十人まで予約があれば、格安で本物が楽しめるという。ワイン、オードブル、松花弁当、果物、アイスクリーム、コーヒーと続く中で、和田さんたちと話もはずんだ。ただ、私の発言にうろ覚えがあったので、帰宅後、たしかめただが、兜子は、私ごとき外野席のファンにまで影響を与えていた。

私が初めて出会ったのは昭和三十二年秋、三宮のたこ焼店「蛸壺」だった。連れと飲んでいると、い



父と同じく、ものをつくるということにこだわる徳也さん（写真左）とピアノを演奏して見せてくれる恵さん。（右）



きなり絡んでこられて口論になつた。最終は昭和五十五年秋、これもいきなり会社へ電話があつて、三宮のスタンドへ来んか、というお誘いだった。もうロレツが回つていなかつたし、一週間後に、この『神戸っ子』のグルメ座談会でお会い出来るから、とお断りするト、

「なあ、古典やつとくんやで。君は、やりかけたら、のめり込むほうやが、近代文学より（古典のほうが）よっぽど深いさかいにな。：そんなら、また会おう」

どこで、どう見て下さっていたのか、日ごろ全くつきあいのない先輩の言葉を、私は神戸市消防局機関誌「雪」（一九八二・四）に書きとめている。電話以後も会つていいない。何しろ、初対面でなくなり合い寸前まで行つた相手が當時「前衛俳句の旗手」といわれた人だと知つた時、おそれ多いことを…と恐縮した後遺症が尾を引いていたのだろう。

しかし、兜子からの電話は、昭和五十五年夏に出版された恵さんの『ひとつじの光の中に』を、私が三ヵ所で紹介したことに対する心づかいだったのだろう。たまたま、グルメ座談会の出席メンバ

一を見て、ひとこと言っておこうと思われたのではなかつたか。恵以さんの、右の本は乳頭腺ガンで入院、手術から復帰までを克明に記録した闘病記だつた。私は、自分の生と死を凝視する訓練は熟達の俳人なればこそだと書いた。この人なら、自分の棺を打つ釘の音を句にするだろう、とも。それから十年余。恵以さんが生死の淵をさまよつた時、次々と手をさしのべてくれた仲間たちが、いまも、目の前にいる。あの時いつへん死んだ恵以さんにとって、仲間たちが気ままに集い、



自由で気ままな空間にはいつも笑顔が絶えない。

自由に埋めてくれる小さな空間こそが、自分の世界なのだ。

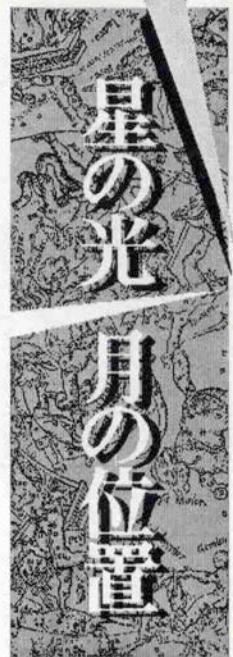
ワインも、ほどのいい温度で、料理とも合う。ふだん貸ギャラリーで好きな人が、好きなように作品（約二十点）をかける壁面も、この日は、兜子ゆかりの作品が、さりげなく、かけられていた。コーヒー・サロンのときには、六畳ぐらいのスペースがあり、松花堂を楽しむ会も、そのテーブルをはさんで行われたのだが、正面に、兜子の色紙があり、音楽講座も開かれていた。音楽講座は、海岸侵しゆく蛇の飢渴（うきは）であり、松花堂を楽しむ会も、そのテーブルをはさんで行われたのだが、正面に、兜子の色紙

など、作品や在りし日の写真が掲げられていく。それらからはうかがえないが、兜子は、いい店うまい店の食べ歩きガイドを共著に持つグルメである。「渦」を継承した恵以さんは、徳也さんと共に、その道を追う。はからずも夫の遺志を受けつぐようになつてゐる。

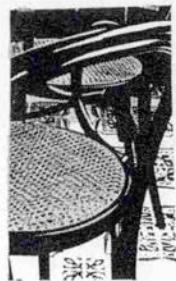
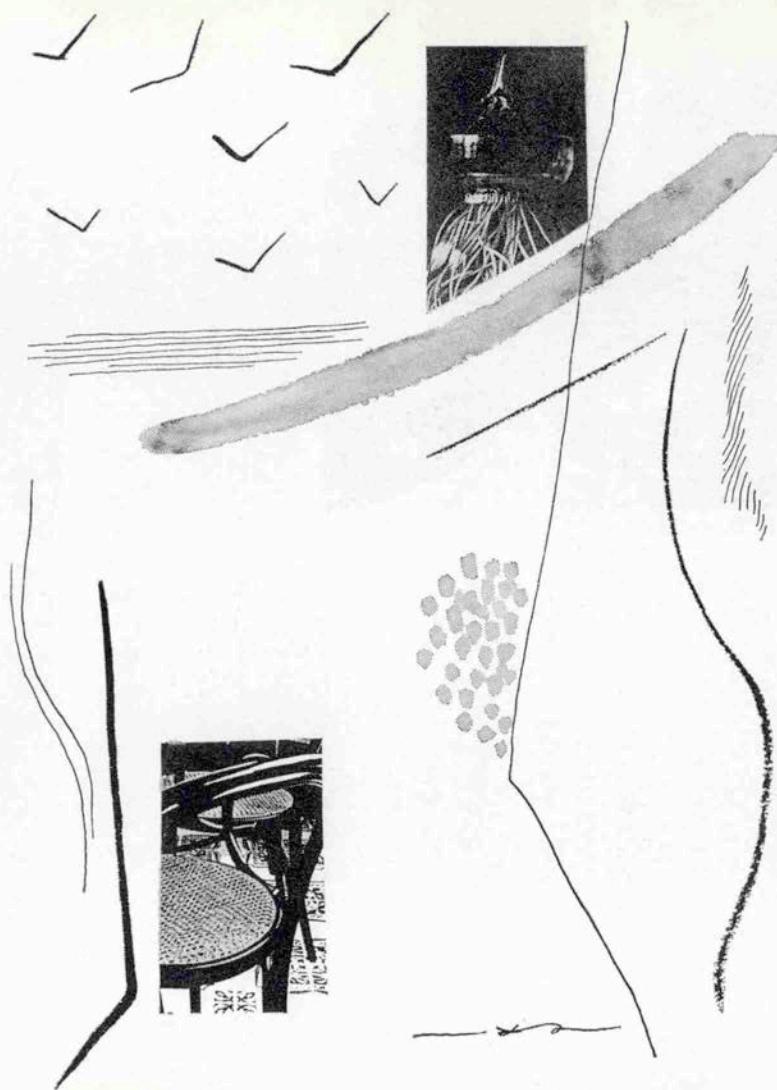
部屋には「徳也さん、頑張ってね！」とサインをした宝塚歌劇OB上條あきらさんの大きなプロマイドも目につく。恵以さんはタカラヅカのオーレドファン。その上、星組のトップ日向薫が、いとこの姪に当たるので、そのファンたちの「アジト」になつてゐる。

いわば何でもありの人間オモチャ箱。はたして何が飛び出すやら。兜子館からの発信は、理屈抜きだからおもしろく、打算抜きだから滅法たのしい。

連載小説△最終回▽



大迫 智志郎



カツト／田中一好

「とてもそうは……」

「そうですか？ 背の高さに驚かれるのと、年上に見られるのは、もう慣れっこになりますが」

「いや、わたしも昔にしては大男だったんで、背の高さではいつも驚かれたものですが。しかし、十六とは」

「どうして年上に見られたのでしょうか？」

「そうですねえ……。きっと目線ですよ」

「目線、ですか？」

「ええ、目の動かし方というか、眼ざしの運びですな」

「はあ」

「自分では分かりませんか」

「ええ、全然」

「目線の移し方が大人びて見える。思春期のおきやんな女の子にそんな子が時どきいますかね」

「思いもしない指摘だった。視線が年齢をあらわすことがあるとは考えたこともなかつた。」

「あの絵の人は？」

「彼女は、美藍さんというんですよ」

「ミア？」

「ええ。美しく、染め物の藍」

「へえ」

「あの子はね、半分北欧の血が混じってるんですよ。たまたまバスで向かいあわせに座りましてね。頼んで、モデルになつてもらつたんです」

「ここでですか？」

「そう。お父さんが放送関係の研修で滞在するので、母方の里であるこの土地へ、向こうの学校を休学してやつてきたといつてましたね」

「いつ、それはいつのことなんですか？」

「もう、十五年ぐらい前になりますか」

「ぼくは体の力が抜けたような気がした。

「……そんなに」

ほくの言葉に老人はゆっくりうなずいた。

「では、今どこに？」

「さあ。知り合つてすぐ、父親の都合でここを離れてしまつたから」

老人が口にした少女の行き先は、ぼくの住む街とはまた違う都會だつた。

「きれいな言葉をはなす子でしたよ」

「きれいな？」

「そう。よどみのない、輪郭のはつきりした」

その少女と話してみたかったとぼくは感じていた。現実の彼女とぼくの接点は見つかりそうにもない。

「お会いしてみたいですね。その、美藍さんと」

老人はそつと笑つてうなずいた。

「……でも、あの少女はもうどこにもいませんよ」

「そうなのかもしませんね」

白い壁にとどく光が赤みを帯びてきている。

「絵のなかに少女を閉じこめたわけですね」

すると、老人は首をふつた。

「いいえ。閉じこめたんじゃなく、絵は少女を開放するんですよ。あのとき、あの絵をかくことによつて、わた

しは少女性を延命させようと企んだのです」

「延命？」

「そう。ある人がある時期だけに持つ特殊な輝きは、そ

の人のなかに放置しても、必ずといつていいほど消滅してしまう。絵は形の美しさを表現するものですね。少女

性は、だからこそ消えずにすむのかかもしれない」

「開放する……」

「そうあればいいなという話です」

ぼくは老人の横顔を見た。

去年他界したぼくの祖父より少し上だらうか。もしかしたら、明治の生まれかもしない。話していくても淀んだところがなく、容貌を除けば不思議なくらいに衰えを感じさせない。

「海に行かれたんでしたね」

「はい。見て帰らうと思ひます」

「じつは、いつもこの時間に浜を散歩することにしてます。……いつしょにいきますか」

「ぜひ」

ぼくは老人と浜へいくことになった。

高く積まれたテトラポットの間を老人は器用に浜へ降りていく。ふじっぽのついたコンクリートの塊のなかで見え隠れする白い頭を、ぼくはぼんやりと眺めた。

日が暮れようとしていた。

波頭が群青と茜色の間の幽玄な線をひく。

昔、フィリピンの沖にある島へいったことがありましたね」

老人は靴先をもう一方の足で濡れた砂に埋めようとやつきになつてゐる。

「戦争、ですか」

「はあ」

彼は指を三本そろえて鳥が餌をつつくように動かしてみせた。

「通信の役でした」

「通信？」

「無電の係です。わたしは通信の技術をもつてました。年をとつてから召集されたこともあって、通信班に回されたんです」

「ずっとフィリピンでいらしたんですか？」

「そう。向こうの無電を聞いて、暗号文を解読したり、発信したり、いわばスペイですよ」

「敵と交戦されました？」
「いや、結局、全面降伏まで一度も米兵の顔を見ずじまいでした。わたしの場合、相手はいつも目に見えなかつた」「ふうん。負けたときは悔しかつたですか？」

「べつに。わたしはとつぶに面倒くさくなつてました。戦争のいけないところは、わたしにしてみれば、單に放つておいてくれないところですよ。わたしは生来、ひど

いものぐさですか」

老人の話しぶりには、鋭い瞬間の記憶をもつてているようすを感じられなかつた。

「……十六、といつてましたね」

ぼくはうなずいた。

「わたしが絵を書きはじめたのがその歳だった」

「……どうして、ですか？」

「さあ。絵をかく、なんて考へてもいなかつたことはなしです。興味は他にたくさんあつた。でも、ゴミが掃除機に吸い取られるようなものだつたのかも知れません」

波がなめらかにした砂上を、羽をひとつまみほど逆立てた千鳥が急いでいる。風は少しも弱くならず、浜ゆうも千鳥も不機嫌な顔をしているように見えた。

ぼくと老人の間に波の先が流れこんできた。ぼくが一步下がり、ふたりには少しの距離ができた。

老人がぼくを見ている。ぼくは他人に見つめられるのが極端に嫌いだつたが、不思議とどうでもいいような気がした。

「……高校生、かな？」

風のせいで聞き取れないふりをしようかと思つた。彼は黙つてゐる。ふいにぼくは向きなおつた。

「ぼくは、登校拒否なんです」

老人の顔に、感情の動きは見られなかつた。

「そう。ここへは？」

「叔母のところへ。遊びに来いって、誘つてくれたんです」

「そうでしたか。楽しいですか、ここでは？」

「とても。気楽に過ごせます」

「じゃあ、よかったです」

風はさらに強まり、波間だけを見ていると自分がとてても小さくなつたような錯覚をおこす。足の下の砂だけを残して、水が海へ帰つていく。いつか飛ぶような勢いで、ぼくは海面を駆けていた。

「孤立しちゃ、ダメですよ」

ぼくは老人を見た。彼は目を細めて前を見ている。

「孤立するのがいちばんいけない」

ぼくは、うなずくことさえ大げさな気がした。

「星の光、月の位置、です」

彼が顔を向けたので、ぼくは目で問い合わせた。

「アメリカ海軍の暗号ですよ。無電のね。あの戦争で亡くなってしまわれたけれど、わたしの上官だった、年下の班長さんがね、教えてくれたんです。わたしが解読した無線のメモをわざとそれを見て、いい文句じゃないかって、それは全能力を傾注して作戦を遂行せよ、といふ暗号だった。あまり重要なものじゃなかった。こっちは必死になつて解読したのにね。グッドラック、ぐらいの意味だった。でも、以来、その言葉はわたしの念仏になつた」

「念仏？」

「そう、念仏です。誰でもその人なりに念仏をもつてゐると思うんですよ。ほら、子供はいつも何かひとりごとをつぶやいてるでしょう？あれも、その子にとっての念仏だと思うんです。わたしは、自分に風穴が必要だとすることができるなら、いいと思いませんか？」

ぼくは彼のいうことが分かりそうな気がした。

「この歳にもなると、放つておくとすぐ孤立してしまふ。でも、それではね。わたしが絵をかきだしたのは、今からすれば社会と関わりをもちたかったからなんですが、それは動機のままで終わらせました。他人に誰も知らない記憶を、いっしょに並べられる人はどんどんいなくなる。いても忘れられるばかりですよ。まあ、忘れられるから人間はやっていくれるのでしょうか。これは、時どきたまらないものです」

「そんなのですか」

「さつき、友達がきていたでしよう」

ぼくは帰ろうとする彼の友人の姿を思いだした。

「彼と、今彼の連れ合いになつてゐる女性は、わたしの幼なじみなんです。今は空港になつてゐるあたりで、毎日遊んだものです」

老人は浜の先を指した。

「十歳になるまえに、彼は関東へ引っ越していった。わたしは後から、向こうの学校へいつたけれど、結局、彼とも、彼女とも歳をとるまで会えなかつた。彼女は、彼女はハルちゃんという名前なんだけど、精神の病気ですね。家庭的に不遇だったようだけど、ずっとここで暮らしていたらしい。五十年ぶりに、わたしが故郷に帰つてみると、ちょうど彼も七十にして離婚し、こっちにもどってきていて、三人で再会したんだ」

想像もつかない時間の厚さを意識して、ぼくはあいまいな感慨を覚えた。



「しばらくして、ハルちゃんと彼はいっしょに暮らすようになつた。ハルちゃんは子供のとき、行動的で、いつもリーダーだった。彼女自身も若いころ一度結婚したことがあつたらしいけどね。彼は昔からハルちゃんが好きだつたみたいでね。じつは、わたしも彼女が好きだつた。魅力的な女の子だったんです。快活な母性をわけへだてなくふりまいてくれた……」

ある予感がぼくのなかで起つた。
「よければ、お友達のお名前を」
「舟越です」
すぐ、ビニールハウスのなかの男と、あけっぴろげに笑う女の姿が思いおこされた。

テトラポットの間に黒い潮だまりができる。海水は波となってそこに飛びこんでくるが、行き場を失い潮だまりのなかをぶちにそつてめぐつてはいる。また波がくる。水は勢いに圧されてあふれだす。古くなつた水の一部は穏やかに導かれて海への潮道を下つていった。

老人が仰向いた。

「陸風に、なりましたね」

「きょうは、一日、店をまかしたわよ」

叔母が、飲みすぎたゆうべのぶどう酒のせいで荒れた声を張りあげた。

「ほつほう、どちらまで？」

「ん、ちょっと」

「ぼくに胸圍を計つての？」

「きのうは遅かつたね。どこいったの？」

彼女は爪を吹いている。

「海をね。少し」

「海を？」

「うん」

「見てたの？」

「うん、まあ」

「ふむ」

叔母は立ちあがつた。

「夕食は自分で作れるわね」

ヒールに指を伸ばしたので、彼女のサーモンピンクのスカートが傾いた三角形のシルエットをえがく。

「誰かといつしょなの？」

叔母はいたずらっぽい目をした。

「あまりいい質問じやないわね」

そういったかと思うと、ひやりとした彼女の手がぼくの両頬をはさみこんだ。

「ねえ、きょうは出かけるの。親しい人とね。もちろん、いっしょにはいてあげられない。わかるでしょ。誰だって自分のことがまず優先。そんなもんよ」

ぼくは笑いがこみあげてきた。

「そりやね。ぼくでも知つてるよ。星の光、月の位置だよ」

叔母は少し驚いたような目をした。

「何？ それ」

「暗号」

ぼくは連れだつて駐車場へ向かつた。隣家の垣から青紫色をしたすだれのような実が幾筋も垂れてきている。砂利を踏みながら路地を抜けると、木枯らしにはためくビニールハウスが見えてきた。

今朝も彼はそこにいた。

ぼくは彼の横顔を注意深く見つめた。叔母の鼻唄が一瞬止まる。

「おはようございまasu」

高い彼女の声に、てらいはなかつた。

ふいに、彼が顔を上げた。

柔軟な目をしている。

風にたたかれるビニールの向こうで、彼の表情が緩んだようにぼくには見えた。

(了)